スポーツにおける「コミニタス性」

舩 本 直 文 （東京都立大学）

“COMMUNITAS” IN SPORTS

Naofumi Masumoto

Tokyo Metropolitan University
Yakumo, Meguro, Tokyo (152)

Abstract

The purpose of this study is to clarify the specific behaviors of sport groups by means of the concept, “communitas” which is offered by V. Turner. This analysis takes the semiotic-structural method which differs from the structural-functional one. And the ritual process in sport is interpreted in the light of the cultural-anthropology. The procedure of this study, firstly, makes an overview of the concept, “communitas”, which appears in three dimensions of culture; “liminality”, “outsiderhood”, and “structural inferiority”, then proceeds to the relation with the rite of passage. Secondly, in view of the interaction of members, “communitas” can be demonstrated with “rhizome type” model which takes the form of the multi-dimensional network system. On the contrary, “community” is characterized by “tree type” model. According to these procedure, this analysis proceeds to the examination of “communitas” and the ritual traits in sport groups.

The results are as follows ;

- 1) It is necessary for the analysis of sport groups characterized by “communitas” to take supplementary approach with the team-work theory which has been developed for the social structural system.
- 2) The specific behaviors in sports, e.g. the encouraging shout and cry “GANBA !”, or mass running exercises in formation, could be clarified as “rites of passage” or “transition rites” in broad sense.
- 3) This shout “GANBA !” is a password for performing audiences to take part in the sport situation sympathetically. At the same time, the shout is also a prayer for athletes to enter into the movement landscape or background of ordinary sports.

緒 言

我国の競技スポーツにおいては、練習時や試合時に普段の社会生活・日常性—に比べ、かなり特有な集団行動が見受けられる。例えば、隊列を組んで号令を掛けながら全員が一斉に行うランニングや準備運動、自分自身に対する鼓舞やチームメイトへの叱咤激励的な「ファイト!」「ガンバ!」などの掛け声、円陣を組んでのエールやミーティング、補欠プレーヤーが球拾いをしながら引切無しに発する雄叫、それに「同じ釜の飯を食う」という合宿システムなどである。これらの現象は集団で行うスポーツに顕著であるが、個人種目でもチームとして競技集団が形成されるならば、必ずといっていい程、よく見受けられるものである。

このような集団行動は、普段の日常的な行動と比べるならば、特異なものであり、記号論的には「有徴」「徴つき」^{註1)} といえよう。また、それらの行動は何がしかの儀式性を有しているとも考えられる。このような有徴で儀礼的なスポーツ特有のさまざまな行動を伴うスポーツ集団は、どのように把握されるべきであろうか。一般的に言えば、このような行動はあたかもチーム・ワークの良さを如実に示すものだと思われよう。

学校の教科体育においては、「学習指導要領」により、次の項目が運動やスポーツを通じて育成される社会的な目標として掲げられている。すなわち、「だれとでも仲よくし」「協力、公正などの態度を育てる」(小学校¹⁾)「運動における競争や協同の経験を通して公正な態度を育て、進んで規則を守り、互いに協力して責任を果たすなどの態度を育てる」(中学校²⁾)「各種の運動を合理的に実践し、運動技能を高めるとともに、それらの経験を通して、公正、協力、責任などの態度を育て…」(高等学校³⁾)などの項目は、スポーツ集団として競争と協同という社会関係の中で、従来の集団論のパラダイムに立脚した「チーム・ワーク」の良さを目標としているかのように思われる。つまり、学校体育やスポーツ教育においては、公正、協力、協調などの人間の社会性の育成が教育目標の一つとして掲げられ、その期待も大であることが窺い知れる。

このような考え方には、前述したスポーツ集団特有のさまざまな儀礼的行動は、あたかもチーム・ワークの良さの現れであり、それは社会性の自動的な育成に通ずるという図式が隠されている。また、そこにはスポーツに対する過剰なる期待、思い入れという感もまぬかれない。果して、公正、協力、協調などの社会性の育成—ある意味では全体社会に必要とされ、望ましいとされる秩序であり規範であるが—はスポーツにおいて可能であろうか。たとえ教育操作がそこに介入する必要性が自覚されていたとしてもである。

従来のスポーツの集団論の研究が既存の集団論の援用—構造—機能連関的アプローチであり、それなりの成果をあげてきたことは周知の通りである^{註2)}。しかし、そこにはスポーツ集団の儀礼性や象徴的行動などが看過されていたとはいえないであろうか。スポーツ行動の深層構造は、このような儀礼性や象徴的側面から問う必要があり、スポーツ集団の分析は、この側面と構造—機能連関的分析の側面との相補的關係でもって理解されるべきである。なぜならば、スポーツ集団には実社会と類似した役割や地位などの秩序立てられた構造—機能的関係だけでなく、スポーツ独自の文化的で象徴的な関係も具有しているはずであるからである。つまり、試合中では学年や年齢などの序列関係が棚上げされるし、役割りの肩代わり(ポジションチェンジなど)も時々起こる。それ以上にさまざまな儀式的行動が見られもする。

そこで、本論考では、スポーツ集団特有のさまざまな集団行動に着目し、V. ターナーのいう広義の感性的共同体をさす「コムニタス」という概念装置^{註3)}を導入することによって、構造—機能連関的な集団論とは別の視点からスポーツ集団を分析することを目的としている。考察の対象とするスポーツ集団はプロフェッショナルな集団を除き、小・中・高・大学あたりの競技スポーツ集団を念頭に置く。方法論的にいえば、スポーツにおける「コムニタス」という集団の特性は、文化人類学のアプローチ、文化記号論のアプローチに基づいて示されることになる。また、スポーツの儀式性は文化人類学的知見から解釈されることになる。さらに、スポーツ集団の人間関係をモデ

的に示すために、最近注目されているポスト構造主義的知見^{註4)}を援用することになる。

このようなスポーツ集団の特性を深層構造と表層構造の相方から相補的に検討することを踏まえた上で、スポーツ教育における社会性の育成という目標は見直される必要があろう。本論考はそのための準備的性格をも有している。

本 論

1. コミュニタスについて

さて、「コミュニティ *communitas*」とはV. ターナーの用語であり、従来の社会学で重要な位置を占める「社会構造」とは対照的な概念装置としての性格を有している。スポーツにおける「コミュニティ性」を分析する前に、この語の語源や関連する語を概観し、次いでこの用語の検討へと進みたい。

1) 「コミュニティ」への語源的・用語的アプローチ

「コミュニティ」とはラテン語の*communitas*であり、これは*communis* (=common) の変化したものと考えられる^{註5)}。この*communis*から派生したものとして*community*がある。このコミュニティとは、共同社会・共同生活体・ゲマインシャフト・地域社会・共通の特徴をもつ集団というほどの意味であるが、これは規範的で序列化され、役割や地位の分化した「社会構造」とであるとされる。これは後述するように反構造としての「コミュニティ」とは対照的なものである。しかし、コミュニティの語源を*communitas*とする説もあり、関連性が大きいといえよう。「コミュニティ」に関連する語で*communis*を語源とするものとして、他には「コミュン *commune*」—共同生活を営む集団、(共産主義的) 共同生活体、ヒッピーの生活共同体など—「コミュニオン *communion*」—共有、仲間、霊的交渉—「コミュニケーション *communication*」や「コモン・センス *common sense*」—センスス・コムニス (*sensus communis*)

としての共通感覚⁴⁾—が挙げられる。これらの語群から「コミュニティ」の広い意味での感性の共同体としての人間関係様態を窺い知ることができよう。また、コミュニティの原初形態として語源的な「コミュニティ」はその純粋な集団性、混沌性を浮き彫りにするといえよう。

2) V. ターナーの「コミュニティ」

V. ターナー^{5) 6)}によれば、「コミュニティ」という社会関係は、宗教、文学、演劇、美術の根幹を形づくり、法、倫理、親族関係、経済にも深い影響を有しているとされる。これは部族社会の通過儀礼、千年王国運動、僧院、対抗文化などの場面に現れるが、日常性格のなかでも遭遇しうるものであるとされる。ここで重要な点は、社会学で広く研究されている「社会構造」とは極めて対照的なものであるという点である。この両者の対比は山口^{7) 8)}によって次のように単純化・明瞭化されている。「コミュニティ」とは広義の感性の共同体、情緒の共同体であり、宗教、芸術、文化、演劇などの精神の文化にみられるもので、信頼、人間的暖かさと自由を得る反文化的仕掛け、カウンター・カルチャーなどのインフォーマルな行動形態である。他方、「社会構造」は規範の共同体としての「コミュニティ」であり、法、倫理、親族、経済などの規範の文化にみられる。

ターナーによれば、この「コミュニティ」を象徴的に表現する儀礼やシンボルや信仰は、「境界性 *liminality*」「部外者性 *outsiderhood*」「構造的劣性 *structural inferiority*」という三つの文化上の側面に現れるとされる。

「境界性」とは、通過儀礼(移行儀礼)における分離—周縁—再統合という明確に区切られた三段階の中の中間段階、つまりどっちつかずの曖昧な状態をさす。この三段階プロセスの分離の局面では、象徴的な分離儀礼でもって社会構造上の地位や固定した文化条件から離脱していくことになる。通過者は象徴的な死をもつて不可視の存在となり、社会構造からハミ出した周縁的存在となる。移行が完了すると統合の儀礼でもって再び社会構造のなかに統合される。「コミュニティ」はこの中間の境界状態に生ずるとされる。構造上の地位

を示す徴は剥ぎ取られ、どっちつかずの両義的存在となる。平等性や仲間意識を規範とする関係のレベルから、自発的かつ実存的な「コミュニタス」のレベルまで、その状態はさまざまであるとされる。

「部外者性」とは、社会構造で認知された地位や役割に基づくのではなく、その外部に生ずる行為や人間関係をさすとする。そこには、常に社会構造からはずれている場合と、一時的に自ら進んではずれる場合の二つが考えられている。このような「部外者性」の例として、ターナーは、シャーマン、司祭、占い師、ヒッピー、浮浪者、ジプシーなどをあげている。この「部外者性」と「境界性」とは、どっちつかずの宙吊りの状態という共通性を有しており、そこに「コミュニタス」が生ずるというわけである。

「構造的劣性」とは、社会の人間関係には構造的にみて強弱の関係が存在し、それが二項対立を示すことになるわけであるが、その構造的に劣位な集団が「コミュニタス」を形成するとされる。例として、父系社会に対する母系社会、征服民に対する被征服民（土着民）などがあげられており、その劣位な集団は柔軟で情緒的で神秘的な補完関係を示すとされる。

山口⁸⁾はこのような三つの側面を有した「コミュニタス」の好例として、日本の時代劇にみられる「長屋」のイメージをあげている。この「長屋」においては、出自や階級の起源は解消され、住人同志の感性的・情緒的連帯が特徴とされる。さらに山口は「長屋」には「過度性」という時間的表現、^{アウトサイド・イン}他所者性（異人性）という社会空間的表現、貧困という構造的表現がすべて顕在化し、それらの表現を通して情緒共同体という象徴的レベルが捉えられる^{コミュニタス}という。この例はまさに正鵠を得ているといえよう。現代では、竹の子族、ロックンローラー族、暴走族などもこの「コミュニタス」の例と考えられるが、スポーツ集団にもこの性向が窺われる。

3) 「コミュニタス」と通過儀礼

図1. 通過儀礼のモデル

(E. リーチ, 文化とコミュニケーション, 紀伊国屋書店, 1981)

E. リーチ⁹⁾は図1のように通過儀礼をモデル化している。そこでは、分離儀礼、境界儀礼、統合儀礼の三つの局面がみられるとされる。青木¹⁰⁾

はこのリーチのモデルに従い、通過儀礼は全体として、象徴的な死、儀礼的な隔離の期間、象徴的再生という三つのレベルによって構成されるとした。この三段階の中間状態である社会上無時間的な休止の期間に「コミュニタス」が形成されるといってよい。それは俗一聖一俗、あるいは、日常一非日常一日常という図式でも示されうるならば、「コミュニタス」は聖（非日常的秩序）を有するともいえよう。

中村¹¹⁾は、通過儀礼を人生の節目において「象徴的な死と再生を通して脱皮していく働きである」（傍点著者）と規定し、現代社会では加入儀礼としての成人式が形骸化して本来の力を失い、そのために＜永遠の少年＞症候群やヤクザっぽい＜暴走族＞の出現をみることになる^{コミュニタス}と指摘している。特に暴走族は加入儀礼が本来もつべき日常性から隔離と特権的な秘儀への参加を期せずして体現しているとし、暴走という非日常的な集団行動は、ターナーのいう「コミュニタス」という概念にそっくり当てはまるという。

暴走族の集団的特性とスポーツ集団の特性には類似した点が多くみられる。両者とも自発的、平等的で感性的の共同体、情緒的の共同体の性格を有しているし、両集団特有の加入儀礼、脱退儀礼、地位や役割の移行儀礼を形成し、それを伝え守っている。しかも、地位や役割の分化が進行するにつれて、両集団とも「コミュニタス性」を喪失し

ながらも統合—分裂—再生などのダイナミックな展開を示し、自己集団の組織化を進めるのである。

4) 「コミュニタス」の組織モデル

集団の組織化、体系化に関して、最近二つの対照的なモデルを示す方法がよく行われている。それは、ツリー（樹木）型とリゾーム（根茎）型の二つのモデルであり、中村¹²⁾は「とくに後者の在り様が現代文化のさまざまな領域…の問題に新しいモデルを提供している」と指摘している。このモデルは、人間関係に限らず、諸々の項目の相互関連性を示す際に、それらの多様性を示すために用いられることが多い。このツリー型とリゾーム型という概念は、ポスト構造主義の思想家とされるG.ドゥルーズとF.ガタリによって示されたものであるが、アレクサンダーもツリー型とセミ・ラティス（半束）型という類似した概念を示している。

図2. 樹状非交叉図式（ツリー型）
（市川浩 〈身〉の構造 青土社、1984、図3、4も同様）

図3. 網状交叉図式（セミ・ラティス型）

図4. 多次元ネットワーク（リゾーム型）

市川¹³⁾はこの両者のモデルを「〈身〉の構造とその生成モデル」として図2、3、4のように「樹状非交叉図式（ツリー）」「網状交叉図式（セミ・ラティス）」「多次元網状図式（リゾーム）」の三つのモデルで示している。

この三つのモデルの関係は中村と市川によると次の様に整理できよう。これらのモデルは、人間の神経システムや運動システムのような自己組織化や自己体系化、あるいはリビング・システムなどの原理として示されたものである。ツリー型は、軍隊や官僚組織などのように、階層構造を最優先させる組織であり、固定式・閉鎖的な関係であるとされる。セミ・ラティス型はツリー型に横断的連絡の組み込まれた中間的なものであり、ツリー型の交叉型ともいえ、クラスの重複が多義性をもたらすシステムとされる。また、ツリー型は人工的システム、セミ・ラティス型は自然発生的なシステムであるともいわれている。さらにこの重複性、横断的連絡が進んだシステムが、多次元ネットワーク型（リゾーム型）のシステムであり、最近の文化理論や情報理論において注目されているものである。このリゾーム型は、どの任意の一点でも他の任意の一点と統合でき、また、どの一点においても分節されうる多様体であり、いかなる構造モデルにも生成モデルにも属さないとされる。

「それは諸状態の交通のみによって規定される脱中心化システムであり、あらゆる種類の生成である」¹²⁾（傍点著者）という記述が、このシステムの多様性を示唆する。

「コミュニタス」をこの三つのモデルと対応させるならば、第三のリゾーム型モデルが対応する。一方、社会構造としての「コミュニティ」は第一のツリー型に対応し、両者の中間的な集団組織がセミ・ラティス型として位置づけられよう。模式的に示すならば、競争社会・学歴社会のように役割や地位が分化し成層化された序列化社会、機能重視の秩序づけられた実社会は、ツリー型の社会構造を特徴とする。一方、さまざまな移行儀礼や加入儀礼、通過儀礼などを具有し、集団成員の絆を確認するための日々の特殊な儀式的行為を伴う「コミュニタス」としてのスポーツ集団は、自由、平等、自発的、無礼講的な集団であり、地位や役

割は実社会ほど分化しておらず、その成層化もさほど固定的ではない。また、感性的でシンボリックな人間関係をその主たる集団の特徴とするため、成員間の繋りは高く、その人間関係はまさにリズム型といえよう。これは極端な図式であるが、スポーツ集団は実際にはこの両者の特徴を合わせ持つと考えるべきであろう。しかし、人間的な絆や紐帯の強固さの点を考えるならば、集団として凝集性が高いのは「コミュニタス」のようなリズム型のシステムであるといえよう。

2. スポーツにおける「コミュニタス性」

以上みてきた「コミュニタス」の概念装置を用いて、現代スポーツの集団的特性を明らかにしていきたい。ここでは、先ず従来のチーム・ワーク論を概観し、本研究との関係や関連した研究に言及する。次いで、ターナーの「コミュニタス」の三側面とスポーツの対応を検討し、更に、スポーツの儀礼性や象徴性の検討へと進みたい。

1) 関連研究

学校体育で期待される社会性の育成は、チーム・ワークの良さをその形成（達成）過程の証しとして考えられることが多いといえよう。しかし、そのチーム・ワーク論はツリー型の社会構造に対応した観点から提示されているものである。ところ

図5. スポーツ空間のモデル

(荒井貞光「チームワークを生み出すための集団運営の技術」
体協監修「コーチのためのスポーツ人間学」大修館書店
1981)

で、荒井¹⁴⁾はチーム・ワーク論を展開する際に、図5のような「コートの中」「コートの外」というスポーツの空間モデルを示し、チーム・ワークを高めるためには「コートの外」としてのクラブワークが重要であるとした。ここには、スポーツの境界性が窺い知れるが、それ以上に構造一機能的意味連関からの主張をその特徴としている。

さて、チーム・ワークとは「成員がそれぞれの地位、役割に応じて責任を果たし、コミュニケーション communicationを円滑に行ない、相互に信頼しあっているまとまりのある状態」「…グループのメンバーが共同の目的に向かって精神的・技術的に協力しあって行動する相互作用」¹⁵⁾であるとされる。前述した「コミュニタス」と「コミュニティ」との対比に基づくならば、このチーム・ワークの定義が該当する集団は、ツリー型の「コミュニティ」であるとみなすことができよう。それは、チーム・ワーク論が既存の集団論の援用であり、スポーツ集団のオールタナティブな側面への視点（両義性への視点）を欠落させていることに起因している。荒井のスポーツの空間モデルは、スポーツ集団の「コミュニタス性」を示唆していると考えられるが、その「コミュニタス性」というメンバー間の相互作用の様態こそ分析される必要があった。つまり、既存のチーム・ワークの神話は、既存の実社会から望まれる集団様態をもとに形成されたものであり、多次元ネットワークのモデルをその特徴とするスポーツの集団論におけるチーム・ワーク論は、残念ながら未着手の領域であるといつてよかろう。本来的には、スポーツ集団のチーム・ワーク論はこの両者によって相補的に展開される必要があろう。

2) スポーツにおける「コミュニタス」 形成のメカニズム

図6は「ラインを引く」という授業過程の一つの事象を例にとり、それを記号過程として展開する際の問題領域を示したものである^{註6)}。「ひろ場にラインを引く」という象徴的事例は、文化記号論的概念装置を導入することによって、次のような記号化プロセスでもって劇的に示される。このラインはコート空間を「分節」し、他のスポー

図6. 「コミュニタス」の記号過程

ツのコートや空間との「差異性」を示すことによって、他者や他の集団、あるいは他の空間を「排除」する（逆にいえば、自分達のアイデンティティを確認する）ことになる。そのため、特定集団専用のコート空間が醸成され、「運動コード」^{注7)}に基づいた特定のスポーツ種目の実施が規定されてしまう。それがひいてはコート空間の「フェティシズム」への道を秘めているという構図である。

テニスを例にとれば、テニスコートのラインは他のコートとを区別、排除し、そこではテニスだけのプレーが許される。それはテニスの集団以外の人間を排除してしまうことになる。さらに、そのテニスコートへの出入りやそのクラブのメンバーになることがステータスなどの記号となり、その記号を所有しようとする願望はフェティシズム（物神がそこに存在するかのように崇める）への道である。このようなプロセスにみられるスポーツの特定集団の形成と他のスポーツ集団の排除こそが「コミュニタス」が形成されるメカニズムの第一歩なのである。

ここで杉本¹⁶⁾のコミュニティ・スポーツ論が示唆に豊む。杉本はスポーツで作られる連帯意識は、排他的状況を生み、スポーツ集団の地域との乖離を生んだこと、スポーツという非日常での連帯が日常での連帯へと転移する可能性が薄く、逆に現実の問題を隠蔽する可能性を内包しているという批判的見解を提示している。このスポーツ集

団の排他性こそ「コミュニタス」の特徴であり、そこにおける成員間の共生—連帯や同調、共感—はそこにおいてのみ意味を有し、通用するのである。その連帯、絆のためには、実社会（全体社会）にとって反規範的なことが活用される場合が多い。それがスポーツ集団の周縁的特徴であり、反—構造という性格を有する「コミュニタス」の特徴を形づくっている。

3) スポーツにおける「コミュニタス」の三側面

ターナーの「コミュニタス」は「境界性」「部外者性」「構造的劣性」という三つの文化の側面に現れるとされ、山口はその典型として「長屋」のイメージを提示したことは前述の通りである。ここでは、青木とリーチの通過儀礼における三局面（図1）とターナーの「コミュニタス」の三側面とを関係づけてスポーツの儀礼性にアプローチしてみたい。

スポーツにおける通過儀礼、加入儀礼としての儀式性は、近年の伝統的な通過儀礼の形骸化と相俟って重要な位置を占めてきている。度胸だめしの行動はスポーツに特有の要件である。挑戦的行動は脱中心化—再統合というプロセスを含む。例えば、スキーで不整地（コブ）の急斜面を直滑降で滑れなければ、スキー学校の指導者にはなれないとか、ゲレンデ・シュプルングは一人前のスキー

ヤーとしてのエンブレムともみなせよう。少年野球では硬球を使用できるのが一人前の野球プレーヤーの証しでもある。日々のサイクルにもスポーツの儀礼性は、その分離—境界—統合のプロセスを象徴的に顕わにする。スポーツウェアに着替え、円陣を組んで開始のエールを叫び、集団で隊列を組んで掛け声を出しながらジョギングや準備運動は、日常性から聖なるスポーツ世界へと移行する儀礼なのである。練習終了時の円陣を組んでのエール、グラウンドやコートから出る際の一礼、聖水としてのシャワーは、日常の社会構造へと再統合される移行の儀礼でもある。このように、長期的にも短期的にも、現在の自己を新たな自己へと改革し、再統合されていくというプロセスをスポーツ集団の「コミュニタス性」は提供しているといえよう。

第二の側面の「部外者性」に関していえば、スポーツ集団の人間関係と実社会の地位や役割とは全く別の様相を呈することが多い。それはスポーツ集団の成員が自ら進んで一時的に社会構造から離脱することに起因する。つまり、実社会とは別の宙吊りの状態に入っていく、そのどっちつかずの状態に入っている徴としてさまざまな象徴的儀礼が行われ、無礼講的振舞いが許されることになる。後述する「ガンバ!」もこの段階の儀礼のための呪文なのである。

構造的にみれば、全体社会に比べスポーツ集団は劣位にあるといつてよい。つまり、現実の社会はツリー型の秩序化され序列化、成層化された社会であり、経済や政治的脈絡に基づいた地位や役割の支配する社会である。そのため、スポーツの「コミュニタス性」は実社会との相補的な関係をその利点としているのかもしれない。しかし、スポーツ集団には常に即座に実社会の論理や秩序が導入される。用具や技術、記録や賞金額などの面にスポーツ集団成員間のハイアラキーが形成され、「コミュニタス」は崩壊せざるを得ない運命にある。

4) スポーツにおける「コミュニタス」と「トポス」

上述のような「コミュニタス」における儀礼性

を伴うスポーツ集団は、中村¹⁷⁾のいう「トポス（場、場所）」を形成しているとも考えられる。中村によれば、この「トポス」という概念は「象徴的なものとしての場所」「身体的なものとしての場所」「問題の具体的な考察と議論にかかわるものとしての場所」「根拠的なものとしての場所」という四つの側面をもつとされる。

第一の象徴的な側面として、スポーツの空間性は世俗的な空間とは区別され、スポーツ独自の論理から醸成される濃密な意味と有意味な方向を持っている。第二の身体的側面では、スポーツ独自の運動形態、運動様式によって、その活動する身体を通して分節化された空間性を有する場が形成される。それは運動の風景や背景を決定するのであり、その空間性はく身でもって知っている>のである。第三の側面では、スポーツ集団の成員が人生のある節々に、自己の生を問い、自己の可能性をつきつめる場としてスポーツの世界も位置づくことになろう。第四の根拠的な場は、主語的なものではなく述語的なものにあるとされる。つまり、主語とは物のことであり、述語的とは存在の状態概念のことをさす。スポーツにおける「コミュニタス」という関係の状態は、存在根拠を求める場としての性格を有するといえよう。

5) 「ガンバ!」の儀礼性と「コミュニタス」

スポーツ場面におけるスポーツ集団特有の諸行動を「通過儀礼」とみなした研究として、杉本¹⁸⁾と阿部¹⁹⁾のものがある。杉本は、皆が号令を掛けて行う集団準備運動を日常性から非日常性への一種の通過儀礼としての「記号的意味」を持つとした。阿部はバドミントンの世界における叫びや応援の様態は「いけない撲殺し」「いたらない私殺し」を行うことにらって、チームの仲間同志の絆を強化するための通過儀礼であるという。

このように「コミュニタス」という特殊な感性的・情緒的共同体の紐帯を確認し、確固たるものにするための集団儀礼として、スポーツ集団の号令や「ガンバ!」等の掛け声は意味をもっと考えることができよう。それは特に「演ずる観客」としての応援団やベンチのメンバーには欠くことのできない特殊性であり、それらの儀式性によって、

仲間や競争相手という他者を介在させた、自己中心化—脱中心化—再中心化というプロセスに参画することが可能になる。その掛け声は、集団としての高揚状態に入っていくために発せられるのであり、その高揚状態を醸成し、さらに高揚した気分を生み出す行為なのである。また、プレーヤー自身が発する、あるいはプレーヤー間で交わされる鼓舞的な掛け声は、試合時と練習時との運動の風景や背景を共通なものにせんとするマジカルな呪文であると考えられる。それを「ガンバ!」を例にとって検討してみよう。

「ガンバ!」は「ガンバレ!」「ガンバロー!」の短縮形であるが、これは「我に張る」から転じたものであり、我意を張り通す、つまり、自分の考えを押し通そうとする気持ち、わがままという意味が本来的である。それは、自己主張、自己中心化の勧めというほどの意味になろう。現在では「どこまでも忍耐してつとめる」²⁰⁾ という意味が強くなっている。しかし、スポーツの場における「ガンバ!」にはその忍耐して努力する対象は明示されないし、その必要もない。記号論的には、具体的指示対象が不在であっても、それが特有の意味を持つことになる。つまり、応援団や補欠のプレーヤーにとって、「コミュニタス」としてのスポーツ集団への参画の合い言葉(パスワード)としての意味を有するわけであるから、その掛け声は、「ファイト!」「シマッタイコウ!」「オッス!」「ウォーッ!」など何でも良いことになる。ここには、本来的には自己主張の意味を有する「ガンバ!」が自己を殺し、集団に同調しなければならぬ図式が見受けられる。一方、プレーヤーの発する対自己的な「ガンバ!」は、自分自身に対する叱咤激励の面も有しているが、常日頃の練習の中で発することにより、練習—試合の状況を類似したものにする意図も含まれている。つまり、身で知っている運動の風景や背景を想起し、自己の運動パフォーマンスを日常のものにしようとする期待から発せられる面をも含んでいるのである。

以上のように、スポーツ場面における「ガンバ!」は象徴的に「コミュニタス」を醸成し、その境界性という宙吊りの状態に移行していくための合い言葉、あるいはその集団に参入するためのパスワー

ドであり、呪文であるといえる。観る側や応援する側にとっても、演ずる観客としての台詞なのである。これはある種の共生として、シンボリックな世界を創り出すことになり、市川¹³⁾の言葉を借りるならば、「間身体的な社会的同調図式」がそこにみられるといえる。この好例として、ニュージーランドの大学ラグビーチームのフィフティーンによって試合前に演ぜられる「ウォー・クライ」があげられよう。これは土着民の戦いや狩りの前の儀式としての集団の舞踏を始源とするが、現在ではそこには集団(フィフティーン)の紐帯を高め、聖なる競技へと移行していくための象徴的意味が残されているのである。つまり、「コミュニタス」への祈りであるといえようか。

結 語

スポーツの集団的特徴は「コミュニタス」をその本分とし、「コミュニティ」という社会構造—それがチーム・ワーク論であった—と相補的關係を有するといえる。従来のスポーツ集団論で看過されていた「コミュニタス性」は、反—構造的な特性を有するものであり、実社会(全体社会)で期待される行動とは逆の行動形態をとる場合もありうる。

学校体育やスポーツ教育における社会性の育成は、ただ単にスポーツ集団を形成し、運動を与えていくことで自動的に達成されるものではない。当然のことながら、そこにはさまざまな教育的操作や配慮(方略)が介在する。しかし、その前提としてスポーツの集団的特性は十全に踏まえられなければならない。また、スポーツ集団で育まれる連帯性—共生や感性的・社会的同調—は実社会へキャリア・オーバーされるものかどうかの検討も重要となろう。それが不十分なまま、昨今のアマチュアリズムへの期待や、スポーツマンの非道徳的行為への避難など、あまりにスポーツに対する過剰なる期待が見受けられるように思われる。

本研究では、スポーツ集団に特有のさまざまな行動に着目し、それを「コミュニタス」という広義の感性的共同体、情緒的共同体を生み出すため

の通過儀礼や移行儀礼として促えた。聖なる状態としての境界の状態に参画するための呪文として、「ガンバ!」という掛け声のもつ特性をも検討した。このスポーツ集団の「コミュニティ性」は多次元ネットワークシステム（リゾーム型）としてその組織的な特徴をもっていたし、それは絶対に固定的なものでなく、流動的、生成変化するものとして考えられる。また、スポーツの集団的特性は社会構造的な「コミュニティ」と「コミュニティ」との両義性をゆれ動くものであるといえよう。

スポーツの象徴論的課題は山積している。具体的事例を極度に掘り下げ、そこにおける儀礼性と象徴性、その現在にもつ有意義性など更に検討する必要がある。次なる課題としたい。

（本研究は、スポーツ教育学会第4回大会（1984）の発表をもとにしている）

注

注1) 「有徴」「徴つき」とは記号論の用語であり、広義では普通（平均）からの逸脱を示すその逸脱の方向には正・負の両ベクトルがある。狭義の「有徴」と「無徴」の例としてmanとwomanを例にとってみよう。両者とも記号内容として「人間」ということを含むがmanの方は男性という指定は不要であり、一方、womanは女性という指定を必要とする。そのためにmanは性に関しては、「無徴」であり、womanは「有徴」ということになる²¹⁾。

注2) 体育社会学専門分科会編「体育とスポーツ集団の社会学」（1974）がこの好例。その他体育社会学の集団論を参照されたい。具体的一例として、今村浩明氏の集団論研究の視点と課題に関する論文や荒井貞光氏のチーム・ワーク論¹⁴⁾をあげておく（体育社会学専門分科会編「体育社会学研究3」）。さらに従来のレクリエーションの集団論やコミュニティスポーツ論も同じ範疇に入るといえよう。

注3) 「装置」とする主たる理由は、単なる分析

道具（conceptual tool）としてこの概念を用いるだけではなく、大がかりな仕掛けや劇的な展開を目指しているからである。つまり、分析視角としての意味合いだけでなく、舞台装置のような景色、背景の急転回のように分析対象の大巾な見直しや様相の大転換を可能にせんとしているからである。

注4) ポスト構造主義とは、記号論や構造主義が静的（スタティック）な構造を扱うに留まるとの批判を受け、デリダの〈脱構築〉、ドゥルーズの〈リゾーム〉などの主張に見られるような、動的関係として社会を促えなおす現代の思潮である。多次元ネットワークシステムは〈多数多様体〉というキーコンセプトに依拠しているし、それは、官僚制のツリー型組織と対照的なものである。浅田彰、中沢新一などの思想が代表的であるが、本稿では、市川浩氏の「〈身〉の構造とその生成モデル¹³⁾」を参考にすること大である。

注5) 研究社「新英和大辞典」第5版、1980年による。ただし、Webstar's New World Dictionaryによれば、communityの語源としてcommunitasがあげられているのが興味深い。つまり、communitasはcommunisの変化したものであると考えられよう。

注6) この展開フローは日本体育学会第35回大会（1984）で「スポーツの記号論（1）－『コート空間』の記号性」と題して発表したものである。

注7) 運動コードとは、まずコードが文化記号論的には慣習化された行動や生活のきまり、おきて、規則などをさすことと合せ、運動文化における運動のしかた、特定の運動のきまりという意味である。一定の運動文化が形態をなすための文化規則といってよい。

引用・参考文献

- 1) 文部省「小学校学習指導要領」1977, pp.91-97
- 2) 同「中学校学習指導要領」1977, p.73

- 3) 同 「高等学校学習指導要領」 1978,
p.47
- 4) 中村雄二郎 「術語集」 岩波書店, 1984,
p.81f.
- 5) V. ターナー, 梶原景昭訳 「象徴と社会」
紀伊國屋書店, 1981, p.209f.
- 6) Victor Turner "Passag, Margns, and
Poverty ; Religious Symbols of Communitas"
Ed. by J.C.Harris & R.J.Park, PLAY,
GAMES & SPORTS in Cultural Contexts,
Human Kinetics Publishers Inc. 1983,
pp.327-59
- 7) 山口昌男 「文化の詩学 I」 岩波書店, 1983,
pp.317-55
- 8) 同 「文化と両義性」 岩波書店, 1982,
第9刷 (第1刷 1975年), pp.229-44
- 9) E. リーチ 青木 保・宮坂敬造訳 「文化
とコミュニケーション」 紀伊國屋書店,
第8刷, (第1刷, 1981年) 1983年, pp.157
-61
- 10) 青木 保 「儀礼の象徴性」 岩波書店, 1984,
p.260f.
- 11) 中村雄二郎 前出 4) p.126f.
- 12) 同 同上 pp.113-15
- 13) 市川 浩 「<身>の構造」 青土社, 1984,
pp. 76-95
- 14) 荒井貞光 チーム・ワークを生み出すための
集団運営の技術 日本体育協会監修 「コーチ
のためのスポーツ人間学」 大修館, 1981,
p.270
- 15) 不昧堂 「新修体育大辞典」 1976.
- 16) 杉本厚夫 都市住民の生活意識とスポーツ
糸野 豊編著 「スポーツ社会学講座2 現代
社会とスポーツ」 不昧堂, 1984, p.290
- 17) 中村雄二郎 前出 4) p. 1415
- 18) 杉本厚夫 シンボルとしてのスポーツの意味
空間 (1) ——文化記号論的アプローチ 「
広島体育学研究第10号」 広島体育学会 pp.21
- 32, 1984
- 19) 阿部一佳 「根性」の記号論ーバドミントンの
場合 「体育の科学」 Vol.34, No.2, pp.
103-06, 1984
- 20) 新村 出編 「広辞苑」第三版, 岩波書店,
1983.
- 21) 池上嘉彦 「記号論への招待」 岩波書店,
1984, p.117